

二〇二一年度 置賜地区 高校生

「地域と私たちの未来を考える」 第四回小論文コンテスト

優秀小論文集

二〇二二年テーマ 「人口減少社会の中でも活き活きと

持続していく地域とするためには」

はじめに

私たちの住む置賜地域は人口が次第に減少していき、このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、地域の安全・安心や伝統・文化の維持存続が懸念されています。様々な要因の一つに、高校生の進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられています。このような状況下においては、二年後に進学・就職を迎える高校二年生にとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることが、どのような進路に進むにしても大事なことです。

このような趣旨から、「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』第四回小論文コンテスト」を高校二年生を対象に実施いたしました。応募された生徒の皆さん、ご指導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。今年もコロナ禍の影響で、応募者の減少が心配されましたが、総数九十七点の応募があり、喜んでおります。

小論文を読みますと、資料編を活用しあるいは自分の体験や知見を基にして、この地域の未来や自分の生き方を独自の視点で表現し、趣旨に沿った小論文を書いてくれました。高校二年生の今、この小論文に取り組んだ経験はこれから先必ずどこかで役立つものと思います。

この小冊子は、審査の結果、受賞された最優秀賞一点、優秀賞四点、入選五点を収録したものです。広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思えます。

令和三年十月二十五日

高校生小論文コンテスト実行委員会

目次

はじめに	1
◇最優秀賞	3
山形県立小国高等学校	和田彩日香
◇優秀賞	4
学園都市推進協議会会長賞	垂水珠那
米沢商工会議所会頭賞	安部華蓮
米沢・置賜経済人クラブ会長賞	樋口蓮巳
米沢信用金庫理事長賞	高橋凜
◇人選	9
山形県立南陽高等学校	二年 垂水珠那
山形県立小国高等学校	二年 安部華蓮
山形県立米沢興讓館高等学校	二年 樋口蓮巳
山形県立米沢東高等学校	二年 高橋凜
山形県立南陽高等学校	二年 青木琉羽
山形県立米沢東高等学校	二年 安部朱音
山形県立小国高等学校	二年 木幡希
山形県立米沢興讓館高等学校	二年 平吹雪羽
山形県立高島高等学校	二年 星万葉
審査講評	18
募集要項	19
資料編	20

つながる力を信じて

山形県立小国高等学校 二年

和 田 彩 日 香

山桜が可憐に咲き、ふきのとうの一気に芽吹く春。真っ青な空に入道雲が湧き、蟬時雨が響く夏。温かな彩りの紅葉が山々を包み込む秋。降り積もった雪が優しい陽の光にきらきらと輝く冬。どの季節も愛おしい自然豊かな町。小国町は私の大好きな故郷である。

だが、我が町にも消滅の危機が迫っている。町報を見ると、毎月人口は減少の一途を辿る。この状況下で、私の好きな小国町を守っていくために、私たちには何ができるのだろうか。

そんな思いから、我が小国高校では「全国高等学校小規模校サミット」を開催している。サミットでは私たちと同じく地域を盛り上げたいと願う全国の小規模校生と

共に、自分たちができることを考える。先輩が始めたこの行事は、私たち後輩が想いを引き継いだ。私は初のオンラインサミットにコアメンバーとして参加したことで、顔を見合わせて話し、考えを深める重要性に気づいた。自校や他校の魅力について共有し合う時に、共感や「いいね！」を貰えたことで、母校や地域に自信と誇りを持てた。更に、意見交換の際には多くのアイデアが生まれ、それらを組み合わせ新たな構想が膨らんだ。自分では思いつかなかった考えに触れたことで私の視野も大きく広がった。出会えたからこそその成果である。

また、私は探究学習を通じて驚いたことがある。それは住んでいるにもかかわらず小国町について知らないことが多々あったことだ。「地域に浸る講座」で、有名な日本酒を生産している酒蔵や美味しいワッフルも食べられるマタギの郷交流館のあることを、高校生になって初めて知った。小国町が内包する魅力にまだまだ気づけていなかった自分を発見した。そして夏休み直前、地域の方と、自分自身の探究学習テーマについて語る「トークフォークダンス」が開かれた。私たち小国高生の話聞くために三十名もの大人の方々が集まってくださったこ

とにも驚いた。真剣に耳を傾け、熱心にアドバイスをくださり、とても嬉しかった。地域の皆様からの溢れる熱い愛情を感じ、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。ある方から「十年後の未来を想像してみて。」と言われた。私は小国町の美しい風景を大切な人と一緒に見、後世にも残したいと強く感じ、向日葵を育てるプロジェクトを立ち上げた。また、飯豊町ゼロカーボンシティー宣言のパネルディスカッションにパネリストとして参加し、SDGsについて語り合った際、持続可能な未来のために自分自身は何もしていないことに気づいた。何かできることはないかと思い、自宅でコンポストの取り組みを始めた。ささやかな一歩である。

思いついたアイデアをそのままにせず、小国町を愛する地域の方々と自分たち若人が共に協力して行動し続け、努力をやめないことが発展への礎となるはずだ。私もこの一員として力になれるように挑戦し続けたい。



優秀賞

学園都市推進協議会会長賞

地域みらい留学生の

私たちができること

山形県立小国高等学校 二年

垂水珠那

今年の三月末、私は初めて小国町に足を踏み入れた。米坂線に揺られ、小国駅で降りた瞬間に広がった、人生で初めて見る積もった雪に、とても感動したのを今でも覚えている。

挙げ始めるとキリがないほど魅力がたくさんある小国町を含む置賜地区は、人口が年々減少しており、過疎化が進んでいるという。この大きな問題について、私は地域みらい留学生ならではの視点から考えてみようと思う。

私が小国町を留学先にした理由は、地域のつながり

が強く、高校生が地域活性化に貢献できる小国町がかった
こいと思っただからだ。住んでいた大阪府箕面市は、大
きな夏祭りはあるが、地域の人と触れ合えるイベントは
あまりなく、同世代以外は知り合いがいけないに等しかつ
た。私は幼い頃からずっと、様々な人とずっと近くで、
もっと濃く関わりたい、そんな環境にいる人が羨ましい
と思っていた。実際に小国町に来て、見ず知らずの私に
挨拶してくださる方が大勢いたり、畑で採れた野菜を頂
いたり、毎日が想像をはるかに超えるほど理想的で、た
まにこれは長い夢なのでは？と思うくらい幸せな気持ち
で過ごしている。

しかし、住んでみて驚いたのは、将来ここを離れたい
と考える同世代が多いことだ。進学等でなく、田舎だか
らとシンプルに町を嫌う中高生も少なくない。こんなに
魅力的な町なのに、良さに気付かず離れてしまうことが、
私にはもったいなく感じる。そのため、中高生の小国ファ
ンを増やすことで、町から出て行く人を少しでも減らせ
るのではと考えた。

そんな小国ファンを増やすためにうってつけなのが、
私たちが地域みらい留学生だと思う。他地域で生活してき

た若者がここに来て感じたこと、素敵だと思っただけを
どんな形でも発信してみると、地元の子が当たり前だと
思っていたことが好きなどころに変わるかもしれない。
それが重なれば、小国町が大好きになるかもしれない。
実際に先日友人と話をしている際「小国町ってこういう
ところ素敵やんなあ。」とぼろつと言ったら、「当たり前
だと思っただ！普通はないの？」と驚いていた。そこで
小国町だけの魅力に気付いてくれたのが嬉しく、もっと
言葉に出してみようと思うようになった。留学生は、様々
なことを学ばせて頂くだけではなく、できることをどん
どん見つけて自ら実行することが必要だと思う。

春夏が瞬く間に過ぎ、留学期間が残り少なくなってきた
今、私たち留学生が頑張るべきことは次の留学生への
PRだ。他の留学先のように綺麗な海や大きな寮は無い
が、小国町には数えきれないほど多くの魅力があり、そ
れを素敵だと思ふ若者もきつといるはずだ。

私は、自然に囲まれて、町の方々があたたかい小国が
大好きだ。だからこそ、絶対に無くなってほしくない。
いつか私が大阪から帰って来ても、大好きな小国町の皆
が再びあたたかく迎え入れてくれたら、とても嬉しい。

米沢商工会議所会頭賞

つながりを求める

山形県立南陽高等学校 二年

安部 華蓮

人口減少社会の中でも生き活きと持続していく地域とするために、私は若者が地域とのつながりを深めて、地域への愛着を持ってもらうことが大切だと考える。そうすることで、若者の都会への流出を防ぎ、地域が活性化するのはないか。

今の日本の人口減少社会の背景にある課題は、若者の地域に対する意識が低いことだと考える。実際に私も、自分の住んでいる地域について知らないことが未だに多くある。これから、たくさんの方の選択肢の中から進路を決めて進学や就職をしていく私たち若者が地域の魅力に気づくことができなければ、華やかな大都市での生活に惹かれてしまい、県外への「若者流出」につながってしまうのではないだろうか。

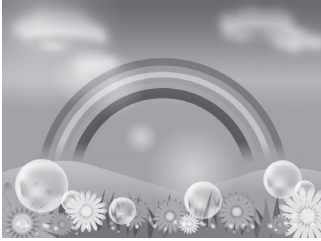
若者と地域をつなぐ、そのアイデアを形にした組織

が、一年ほど前から私の住む南陽市にできた。それが、「南陽高校市役所部」だ。私は今、そこに所属して活動している。南陽高校市役所部は、南陽高校と南陽市役所が共同で立ち上げた部活動のような課外活動を行っている。活動では主に自分たちが気づいた南陽市の魅力をSNSで発信している。特に今年には南陽市の魅力を知るために、南陽市内にある果物農家さんで果物狩りを体験させていただいたり、南陽市内のジェラート屋さんと共同で新しい商品を開発するなどの活動も行っている。その活動を通して、南陽市で何かものを提供している方々のこだわりの強さと、お客さんに喜んで欲しいという気持ちの強さを心で打たれた。多くの地域の方と関わり、つながることで、今まで知ることができなかった地域の魅力を知ることができたと同時に、この人情の厚い南陽市が好きだと感じた。

若い世代に地域の良さを知ってもらうために、南陽高校市役所部のように、自治体と学校が連携することが重要だ。若者が自分の住んでいる地域と関わり、地域の魅力を知るきっかけ作りを自治体が手伝えることで、若者と地域のつながりを深めることができる。今現在地方は人

口が減少し、地域消滅さえ懸念されている。しかしこれから先、自分の住んでいる地域に愛着を持つ若者が増えれば、地元に残り、地元を盛り上げてくれることが期待できる。そうすることで地域が活性化していくのではないだろうか。それが更に進めば、地域の人が増えていくことにもつながっていくだろうと私は期待したい。

私自身、将来看護師になり、県内の病院で働くことで大好きな地元を支えていくつもりだ。また、若者が地域の魅力に気づき、愛着を持つきっかけを作ることができると大人になっていきたい。



米沢・置賜経済人クラブ会長賞

Uターンで地域活性化

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

樋口蓮巳

私たちの住む置賜地域の近年の課題は、著しい人口減少である。その一因として「若者流出」が挙げられる。そこで私は、子育てしやすい地域をつくることでUターン促進を図り、人口減少社会の中でも生き活きと持続していく地域をつくることができると考える。

山形県の令和二年の人口移動状況は、県外転出者が県外転入者を大きく上回っている。特に、進学や就職を迎える若者の転出過多が要因だと考えられる。しかし、県外転出した若者が子供の誕生を機に地方へ戻る、または都市から地方に移住するUターンの事例は多い。その人々の多くは、自然や人柄、歴史などの環境と子育てをする上での地域からの支援を重要視している。置賜地域の自然や人柄には目を見張るものがある。だからこそ、

子育てのために置賜地域へUターンする人々への地域からの支援を充実させることで、より子育てしやすい地域にしていく必要がある。

置賜地域は、イギリス人旅行作家のイザベラ・L・バードに「東洋のアルカディア（理想郷）」と称えられる程の、実り豊かな自然と人情がある。山に囲まれた内陸の盆地は、四季の変化に富んでいる。四季折々の伝統料理や美しい景観は極めて魅力的である。また、私の住む南陽市では、朝の交通量が多い時間帯に、見通しの悪い交差点や信号機がない横断歩道を小中学生が安全に横断できるよう、毎日の見守り活動をボランティアで行っている。さらに米沢市は、伊達政宗や上杉謙信などの歴史に名をはせた人物にゆかりがあり、それらに因んだイベントが行われ、歴史に触れる機会も多くある。このような素晴らしい自然や人柄、歴史を兼ね備えている置賜地域の環境は、子育てに適しているといえる。

子供の誕生を機に置賜地域にUターンする人々への支援として、空き家バンクに登録されている空き家に、リフォームして住む場合、市や県と契約することで補助金を出すという制度を提案する。空き家問題は近年、一

刻も早く解決しなければならない問題の一つである。もし、この制度が実現すれば、Uターンを促すと同時に、置賜地域の空き家問題の解決にも近づくのではないだろうか。

私たち高校生は、ゴミ拾いのボランティアで置賜地域の美しい環境を守ることができる。また、幼稚園や保育園などで職業体験の場を設けることで、高校生の将来の可能性を高めると共に、子育てにも貢献できるはずだ。

以上より私は、人口減少社会の中でも活き活きと持続していく地域とするために、子育てしやすい地域づくりを提案する。地域からの支援を確かなものにするこゝで、Uターン促進を図る。高校生も主体となって地域に貢献し、課題の要因になっている「若者流出」の改善に努めたい。そして、私の大切な故郷である置賜地域の更なる繁栄と存続のために奮励していこうと思う。



米沢信用金庫理事長賞

アイデアで地元とつながる

山形県立米沢東高等学校 二年

高橋 凜

資料2を見てみると、特に若年層である十八歳～二十四歳の県外転出は県人口減少の大きな原因となっている。実際に友人や自分は県外に進学することを夢見ている。さらに、子どものころ大好きだったお店や商店街が活気を無くし、閉鎖が相ついでいる。にぎわっていた場所が減り、以前よりも活気が無いように感じてしまふ。その中で私が地元の活気を取りもどすことについてなにかできることはないかと考えた。

資料5から若者定着、若者回帰に向けた県内の取組みとして、各高等学校における課題研究やインターンシップなどの事業が実施されていることや、働く人の様子・思いをSNSで発信し、地域で働く魅力を伝えていることが分かる。また、Uターン・Iターンを通して地元で

働くことの良さ・魅力を実感してもらいたいという思いを読みとることができる。

私には、地元について考える機会となった出来事が大きく二つある。一つ目は「びっくりコンペ」である。「びっくりコンペ」は米沢東高校に在学する先輩が企画したもので、置賜地方に居住する中高生が、地域の魅力発信や課題に関するテーマについて、それに役立つ近未来的なグッズや技術などのアイデアを募集するものである。私もこの企画に応募することで、友達と地域の魅力をどのようなアイデアで発信していくかを考えることができた。自分達のアイデアが実現するかもしれない、と楽しみながら地元と私とのつながりを再確認し、自分のアイデアで地元を変えたいと思うようになった。二つ目は、起業ゼミだ。起業ゼミはビジネスについて学び、実際にサービスを考えるもので株式会社ガイアックスが主催したものである。このイベントでは地元に関するサービスを考える人も多く、地元の魅力をどうしたらたくさんの人に伝え、それによって地元を活気づけられるか、などの意見交換ができた。この活動を通して、私は自分達から活き活きとした町、社会をつくっていくのだという意

識になっていった。起業ゼミのイベントが終わってから
も、メンバーと空き地の再利用や若者向けイベントにつ
いて話す機会ができ、自分が考えたアイデアを地元で実
現したいと思うようになった。

この経験から、人口減少社会の中でも活き活きと持続
していく地域とするためには、自ら地元が抱えている問
題に目を向け、それを解決する方法についてたくさん
の人と共有し、一緒にアイデアを出していくことが必要で
あり、大切だと考えた。自分のアイデアが地元を活気づ
ける一歩になるという意識が、自分自身で行動し、何か
を創り出していくことの楽しさへとつながるのだ。

これからは、アイデアを出すだけでなく、実現に向け
た活動をしてみたいと思っている。その中でたくさんの方
人と思いを伝え合い、さらに地元を活気づけられるよう
に頑張りたい。



入 選

世界の人と

共に生きることが目指して

山形県立南陽高等学校 二年

青^{あお}木^き琉^る羽^う

人口減少社会の中でも活き活きと持続していく地域と
するには、それぞれの地域で日本人にとって新しい環境、
新しい出会いが必要だと思う。そのために私は、外国人
の移住者を増やす事が良いと考える。

二〇二一年七月二十六日の長崎新聞社の記事による
と、県外に出ていく若者は、「外の世界を見てみたい」
という気持ちの人が多い。県外に行くことによって全く
知らない人と関わることで自分の世界観や考え方を広げ
たかったから、という考えだそうだ。現在、日本は他
の先進国に比べ海外からの移住者が少ない。それもあり
新しい出会いという刺激を求めるには、住んでいる地
域に留まるのではなく、海外からの移住者の多い都市部

に引越す方が合理的であると言える。だがそれでは地域の人口減少に繋がってしまう。そこで、それぞれの地域で外国からの移住者をどんどん受け入れる事ができれば、住んでいる地域から外へ出ていかななくても全く違う文化で、全く違う生活をしてきた人とも関わる機会ができる。また本場の外国語に触れることができコミュニケーションの幅も広がる。様々な国の人々と関わることは、これからの社会で生きていくには大切な経験であると言える。ここで私が考えたのは、外国からの移住者を増やすために多言語対応をもっと取り入れていくことだ。

私は高校の探究学習の活動で「国際理解」をテーマに、置賜地域で外国人に向けて日本語教室を開いている女性からお話を聞いた。外国人が日本に住む中で大変だと感じている事の中に、日本語の理解が難しいというのがあった。例を挙げると、市役所での日本の手続きは他国よりも複雑な上に日本語の理解も難しいため大変だそうだ。インタビューをするまで知らなかったが、南陽市にはそんな外国人に寄り添う地域コーディネーターという存在がいるそうだ。外国からの移住者が地域コーディネーターの方と出会うことが出来れば、もっと楽に日本

で生活ができるが、地域コーディネーターと上手くマッチングするのが難しいそうだ。さらに、多言語に対応した表示があってもそれに気づけずにいる外国人も多い。誰もが一目でわかるような多言語対応表示を増やしていくことで、外国からの移住者も住みやすい地域になり、移住者が増えていくと考える。

以上から、人口減少社会の中でも、外国からの移住者を増やしていくことで活き活きと持続していく地域となると考える。受け入れる側である日本人は、もっと外国人に寄り添い外国からの移住者が住みやすい地域にしていくべきだ。長井市では旧校舎を使った英会話カフェが開かれている。年齢や国籍を問わず事前の申し込みも不要なため気軽に参加しやすい。他の地域でもこのような活動を取り入れていくことで、世界の人々と共生する地域となっていくのではないだろうか。



選んでいいとこ米沢

山形県立米沢東高等学校 二年

安部 朱音

私は米沢が大好きだ。人も優しくて食べ物もおいしい。田舎だけ災害も驚くほど少ないし、とても住みやすい町だ。けれど人口がどんどん減少していることはすごく悲しい。小学校五年生のとき、そのような思いを抱いて人口調べをしたことがある。市役所へ行き十年間の人口の変動を調べ、それを元に計算をしたところ、一三七年後には米沢の人口が〇になるという結果に衝撃を受けたことを覚えている。その時の研究結果では少子高齢化はもちろんだが、米沢を出て行く人の年齢が十五歳から十九歳と三十五歳から三十九歳が一番多いということもあり、進学や就職のために市外へ移動していること、雇用環境の悪化も人口減少の原因だという結論に達した。

大きな夢を持った若者がどうしても都心に出て行きたくなってしまふのは仕方ないと思う。しかし、反対に都心で育った人が田舎に憧れを持つことも多いはずだ。私

はこのことに目を向けることが大切だと思う。たとえば、移住したいという人に、米沢を選んでもらうためにはどうしたら良いのか。まずは米沢に住めば良いことだらけだということをアピールしなくてはならない。コロナ禍で大打撃を受けている世の中だが、その中で良いこともある。オンラインの普及だ。それにより都心での仕事も米沢でもできるようになり、移住したい人とオンライン上で直接話をするなどで、魅力を伝えることもできるようになった。都会ではなかなか手に入らない一軒家を安く提供したり、若者が何人かで暮らすシェアハウスを作ったりするのも良い。自分たちで作物を作れるように畑なども付け、農業体験ができて楽しいと思う。米沢には美味しい食べ物がある。美味しいお酒がある。果物王国だ。まずは都会の人の胃袋を掴むことが一番だろう。東京で食事をしたとき、米沢の米の美味しさをつくづく再確認した。食べ物美味しいことは、生きていく上でとても重要なことだ。そして米沢には美しい四季がある。私たちには少々厄介な豪雪も、都会の人にとってはいベントに違いない。問題は、最初は嬉しくてもそのあと嫌になってしまう除雪作業である。これは仕方ない

ことなので、その辛さを上回るような、雪を利用した大規模なイベント開催を考えてみるのもいいと思う。

私は心が温かい人がたくさんいて、安心安全な人とのつながりを築くことができる米沢が大好きだ。私は今回、この小論文に取り組んだことで、将来は米沢の魅力を発信し、移住してきた人のために新たな企画を推進する活動をしたいと考えるようになった。人口減少の問題を解決するのは非常に難しいが、地域に貢献したいと考える若者を、増やしていきたい。そして、都会から来た人に、この米沢がもう一つの故郷といってもらえるような地域をつくっていきたい。



地域を想う心

「地域留学生から見た小国町」

山形県立小国高等学校 二年

木 幡 泉 希

「人口減少」それは置賜地区だけではなく、日本全体が抱える課題の一つだ。世界規模では、人口は爆発的に増加しているのに、日本では何故、人口減少が起こっているのか。

私は、日本の子育てのし難さと、若者が労働に対してマイナスイメージを持っているからではないかと思う。他国に比べ、日本の子育て環境には明らかに不備がある。更に、国民の勤労観は変化し、一生懸命働いて家庭を築きたいと思う人も減っている。この二点が作用し、出生率は徐々に下がり、結婚願望を持たない若者も増えているのではないか。

そこで私が注目したのが、小国町で始まった「マルチワーク」という働き方だ。子育てに関する法整備等は一人個人にはどうにもならないが、子育てし易い環境を探し、

楽しく働く方法を見つけることはできる。「マルチワーク」はまさしくその一環である。具体的には、自分が働く場所を固定せずに季節毎に違う地域で働いたり、本業とは別にある時期だけ他地域で働いてみたり、様々なワークスタイルが可能だ。そして、外から人材を呼び込むのと同時に、地域内では今ある産業を維持しつつ、新たな仕事を生み出すことで、持続可能な地域を創ろうとする仕組みである。

私がこの事業で注目する点は、既存の働き方と違い、様々な仕事・地域に触れられることだ。これにより真に自分がやりたい仕事を発見する、新事業を始める、暮らしや子育てをし易い地域が見つかる等の、多くのメリットがある。そして、何よりもその地域との関係人口が増える。各地域の人口が減少する今、これはとても重要だ。当該地域を気に入った人が別の人を巻き込み、また別の人を……。そうして関係人口が増えれば、少なからず移住希望者が出てくる。若者流出を止めることは難しいかもしれないが、その分移住して来る人がいれば、人口減少を止めることは可能だ。マルチワークによって外から沢山の人が来て町に活気が出れば、人口増加も夢ではない。

それ故、私は関係人口が増えることが肝要で、マルチワークがその架け橋になると考える。

小国町は現在人口が八千人を切り、皆どこかで地方消滅の不安を抱えている。だが、そんな中でも役場の職員は日々町の存続について知恵を絞る。若者はマルチワークを始め移住者コミュニティの設立をし、町の高校は県外留学生の受け入れを行い、活気に満ち溢れている。埼玉からの留学生である私の眼には、そんな小国町が、近い将来、持続可能な地域社会の先駆けとなるモデルとして映っている。

小国町のように人口減少が進む地域は日本中にある。我々がやらねばならないことは、各々が地域の一員として地域の為に何ができるかを考え、少しずつ実践することだ。その地域を想う気持ちが地域を持続させる一番の支えとなる。地域が残るか消えるか、それは人の想いに懸かっている。

若者に魅力を伝えるために

山形県立米沢興譲館高等学校 二年

平 吹 雪 羽
ひら ぶき ゆき は

私は人口減少の要因の一つである「若者流出」を食い止めるために、置賜の企業の魅力をもっとアピールするべきだと考えます。

若者が都市で暮らしたい理由に、就職の選択肢が多いからというものがあります。この理由をあげた人の中には、地元にはどんな企業があつて、どんなことをしているのかわからない人も少なくないと思います。山形県内でも様々な活動がされていますが、あまり知られていないことが多いと感じます。例えば、高校一年生を対象とした職業体験会（WAKUWAKUWORK）は、学校単位での開催となるため、参加したくてもできないことがあるかもしれません。また、「よねざわのわわわ」プロジェクトのインスタグラムの利用は、簡単に見ることはできるものの、この存在を知る機会が少ないと思いません。

そこで私が提案するのが、高校生・大学生を対象としたワークショップを開催することです。これを開催するにあたって三つのポイントを考えました。

一つ目は、様々な種類の多くの企業に参加してもらうことです。まずは県内にどのような企業があるのかを知ってもらうことが大切だと思います。したがって、多ければ多いほど、その分知ってもらうことができます。

二つ目は、アットホームな空間にすることです。参加者が自由に見て回ったり、企業の方と話したりできると、楽しみながら学べると思っています。

三つ目は、可能な限り職業体験の場を設けることです。ただ話を聞いたり、資料や写真を見るだけでは、企業や仕事についての理解が浅く、良くも悪くも想像に留まってしまうと思います。しかし、自分で体験して、自分で実際に見ることで理解度がぐんと上がり、より明確になると思っています。

また、コロナ禍でもコロナが終息しても、オンラインでも行うと良いと思います。実際に体験することはできませんが、どこにいても参加できるので、日本全国の人々に参加してもらうことができ、より多くの人々に山形の

企業の魅力が伝えられると思います。

「人口減少社会の中でも活き活きと持続していく地域」を作るためには、より多くの若者が住みたくなる、戻りたくなるような工夫が重要だと思えます。その工夫の一つとして、ワークシヨップを行い山形の企業についての関心、興味を深めてもらえる機会を設けるのが効果的だと思います。



今の私と将来の私にできること

山形県立高島高等学校 二年

星^{ほし} 万^{かず} 葉^は

現在の日本は、少子高齢化と共に人口減少にもみまわられている。それはここ置賜地区でも同じである。資料1「山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口」を見ると、二〇一五年から二〇四五年の人口変化率は、置賜地区で三十八パーセント減少すると予想されている。その要因の一つとしてあげられるのは、山形県の若年層の人口転出である。資料2の表2「若年層の県外転入・転出数」を見ると、県外転出の方が転入よりも明らかに多いことが分かる。つまり、若年層の転出者をおさえることができれば人口減少をおさえることができるのではないか。

どうすればその転出をおさえることができるのか。そこで私は、今の自分にできることと、将来の自分にできることの二つの側面から考えてみた。

まず、今の自分にできることとして、インターンシッ

プで得た情報や学びを活用できるのではないかと考えた。インターンシップの事後活動として、業務内容などをまとめたポスターを廊下に掲示していた。しかし、そのくわしい内容は年次内でしか発表されていない。年次内で発表し、ポスターを掲示するだけではなく、他の年次にむけても発表すれば良いのではないか。また、発表内容を年次に合わせて少し変えることによって地元企業の魅力を伝えることができるのではないかと思う。例えば、一年次生は、まだ進路について大まかにしか考えていない人もいる。だから、主に業務内容について掘り下げて発表する。三年次生は業務内容等の基本的な情報は持つているはずなので、職場の雰囲気や実際に業務をやってみて思ったこと等を掘り下げたり、その年次生が必要としている情報を伝えたりすれば、魅力も伝えることができるのではないかと考えた。

次に、将来の自分にできることとして、自分自身が広告塔になることである。今の私はまだ子どもで行動範囲が大人よりも狭いため、視野が狭い。だが、就職すれば行動範囲も拡大し、金銭的にも少し余裕ができるため、視野も広くなる。県外に出るにせよ、県内に残るにせよ、

今まで気付けなかった置賜地区の魅力に気付けるのではないか。そして、その魅力をまわりへと発信していけば、少しでも地元の魅力を伝えられるのではないかと思う。人口減少による地方消滅という問題について考える良い機会になった。置賜地区の未来を担うであろう一人の人間として、これからもこの問題について考えていきたいと思う。私にできることはとても小さな事だが、少しでも置賜地区の未来が明るいものになれば良いと思う。



審 査 講 評

第四回の小論文コンテストには、九十七点の小論文が寄せられました。応募の背後には、各高校の先生方や地域での活動を支援してくださっている方々のご苦労があつてのことと感謝しています。

少子高齢化や都市部への人口集中が進み、地方の人口が減少していることは知られていますが、資料編の具体的な数字を見ると、このままでは「地方消滅」さえ懸念されます。このような郷土の現状から未来を予測し、起こるであろう問題の解決策を考えることは、高校二年生にとつてはとても難しい課題です。しかし、自分のこととして考えてみると、地元には学びたい大学が少なく、就職先も他県に求めざるを得ないことが原因の一つだとわかります。これを解消するために、郷里の良さや住みやすさ、地元の企業の魅力を発信して、地元に戻って就業できるように、また、他地域からも来てもらえるように出来ないかと議論し、自分なりの問題解決策や具体的な提案にまとめていくことに感銘を受けました。また、すでに実践している取り組みが報告されていることには驚かされました。今回の応募を機に考え始めたという小論文も多く見受けられました。そのような問題意識を今後も持ち続けていただき、その先にまた新しい展開が生まれることを期待します。また、応募者が取り組みやすいように、高校側の意向を踏まえながら、応募小論文の内容や論文審査の状況に合わせて改善していくつもりです。

内容や水準のばらつきなどを考えると、指導に当たっておられる先生方には、小論文の書き方、特に伝え方の基本的な学習や論文の構成などのご指導をお願いするとともに、さらに生徒たちが自主性や主体性を発揮出来るよう、ご配慮いただければとお願いするものです。

置賜地区高校生「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

募集要項

一. 趣 旨

少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出」があげられていますが、地域と私たちの未来はどうなるのか、2年後に進学・就職を迎える皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。本コンテストは高校生の皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願い実施するものです。

「人口減少社会の中でも活き活きと持続していく地域とするためには」

置賜地区高等学校 二年生

二. テーマ 三. 対象者 四. 応募規程

①募集要項の資料編や独自の資料を参考にして、テーマについて考えをまとめてください。また、各自の題名を付けてください。②文字数は一二〇〇字以内（四〇〇字詰め原稿用紙三枚以内）③原稿用紙は縦書きに、一行目に題名、二行目に学校名・氏名、三行目から本文を書いてください。題名、学校名・氏名も字数に数えます。④使用鉛筆はHB又はBを用い、字は大きく鮮明に書いてください。

五. 審査の観点

①提案力 独創的（独自性）で前向きな提案であるか。②主体性 自分が課題解決にどのよう具体的に関わっていくか。③論理性 客観的、合理的な論理展開ができていくか。④誠実性 課題解決の意欲や勉強した努力が感じられるか。⑤表現力 誤字脱字がなく、言いたいことを十分に伝えられる文章であるか。

この五つの観点を踏まえた小論文を書いてください。この観点で評価します。

各学校の担当者まで

各学校で指定する期日まで 各学校から主催者への提出締切 八月三十一日（火）必着

最優秀賞一点 優秀賞四点 入選五点

十一月月上旬 伝国の杜大会議室（予定）

米沢有為会会長 平山英三

公益社団法人米沢有為会 学園都市推進協議会

置賜総合開発協議会

置賜地区高等学校長会 米沢商工会議所 米沢・置賜経済人クラブ
米沢新聞社 NCV 米沢信用金庫

六. 応募先 七. 応募締切 八. 表彰 九. 表彰式 十. 審査委員長 十一. 主催・共催 十二. 後援・協賛

第4回小論文コンテスト 資料編
2021年テーマ 「人口減少社会の中でも生き活きと持続していく
社会とするためには」

**はじめに、山形県及び置賜地区の人口の動きを、30年の長期的スパン（資料1）と、
2020年時点（資料2）の二つの視点から見てみましょう。**

資料1 山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口（10年毎）

西暦	2015	2025	2035	2045	人口変化率 2015～2045（%）
山形県	1,123,891	1,015,910	897,075	768,490	-31.6
米沢市	85,953	77,483	67,817	57,720	-32.8
長井市	27,757	23,918	20,160	16,377	-41.0
南陽市	32,285	29,017	25,494	21,762	-32.6
高島町	23,882	21,131	18,214	15,115	-36.7
川西町	15,751	12,783	10,148	7,655	-51.4
小国町	7,868	6,059	4,517	3,220	-59.0
白鷹町	14,175	11,918	9,839	7,797	-45.0
飯豊町	7,304	5,956	4,755	3,620	-50.4
置 賜	214,975	188,265	160,944	133,266	-38.0

＜出典 国立社会保障・人口問題研究所＞

置賜地区では、2045年の人口が2015年と比較して38.0%減少します。

資料2 山形県の人口移動状況<2020年(令和2年)山形県の人口と世帯数から>

○表1 全年齢層の県外転入・転出者数 (人)

	県外転入[a]	県外転出[b]	転出超過[b-a]
2020年	13,883	17,070	3,187

※令和元年10月～令和2年9月の状況

「県外転入」は県外からの転入を、「県外転出」は県外への転出を表している。

2020年の本県の県外転入、転出状況は、3,187人の転出超過になっています。

○表2 若年層の県外転入・転出者数 (人)

	県外転入	県外転出	転出超過
18歳	390	890	500
19歳	647	1,073	426
20歳	425	650	225

21 歳	427	733	306
22 歳	660	1,213	553
23 歳	752	1,379	1,379
24 歳	578	813	235
計	3,879	6,751	2,872

<出典 山形県ホームページ>

18～24 歳の転出超過は 2,872 人となり、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因になっています。

資料 3 山形県の高校卒業者の県外への進学・就職状況 <出典 山形県統計企画課>

	卒業者数	大学等進学者 数(うち県外)	専修学校進学者 数(うち県外)	就職者数 (うち県外)	計 (うち県外)	県外の 割合
2019年度 (令和元年度)	9,849 名	4,390 名 (3,038 名)	2,170 名 (1,435 名)	2,934 名 (643 名)	9,493 名 (5,119 名)	53.9 %
2020年度 (令和2年度)	9,791 名	4,515 名 (3,254 名)	2,157 名 (1,444 名)	2,755 名 (707 名)	9,427 名 (5,405 名)	57.3 %

<出典 山形県ホームページ>

高校卒業者のおよそ5割～6割が進学就職で県外に出ていきます。

人口減少の一因である「若者流出」の状況を統計データで見てきましたが、これに歯止めをかけるさまざまな対策が講じられています。最後に、それらの取組を紹介しましょう。

資料 4 置賜圏域の将来像…行政施策「置賜定住自立圏共生ビジョン」の取組例

置賜圏域は、歴史的背景や地理的要因から、行政区域を越えて生活圏を共有し、経済、教育、文化などの面で深いつながりを持ちながら発展してきた。これまで圏域内の各市町は、それぞれが活力ある地域づくりを実現するため、様々な取組をしてきたが、人口減少や高齢化は急速に進んでおり、今後もこうした傾向は続くものと予測される。この状況下で、地域の活性化を図り持続的に発展していくためには、単独自治体での事業展開には限界があることから、広域で連携し、効果的、効率的に行政運営を行うことが必要である。こうした認識のもと、置賜3市5町は、それぞれの独自性を維持しながら、地域の魅力をしっかりと磨き、その上で様々な分野において連携を深めつつ、住民の暮らしに必要な諸機能を圏域全体として確保することで、住民が暮らしやすい、活力ある圏域を創造し、共生共栄を目指す取組を行う。それが「置賜定住自立圏」というもので、米沢市が「中心市」、2市5町が構成市町となり協定を締結し、共生ビジョンに基づいて連携事業を推進する。具体的な取組として①生活機能の強化（医療、福祉、教育、産業振興、環境、水道、消防・防災）、②結びつきやネットワークの強化（交通、移住・定住・交流）、③圏域マネジメント能力の強化（職員等の交流）の3つの政策分野で取組を行う。

<米沢市「広報よねざわ」2019.5.1より>

資料5 若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

事例1 山形県と大学等とのUターン就職促進協定 25大学等と協定を結ぶ

山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・Iターン就職の一層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。

＜協定締結大学＞ 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、明治大学、国士舘大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、帝京大学短期大学、明治学院大学、立正大学、拓殖大学、立命館大学、法政大学、千葉商科大学、神奈川工科大学、関東学院大学、東京工科大学、日本工学院専門学校、日本工学院八王子専門学校、日本工学院北海道専門学校

＜出典 山形県雇用・コロナ失業対策課＞

事例2 山形県若者定着奨学金返還支援事業の実施

大学等へ在学の方又は進学予定の方を対象として、県と県内市町村が連携して、奨学金の返還を支援する事業。米沢有為会、長井教育会、飯豊町も市町村枠で実施。平成27年度から始まり今年度も継続。要件は日本学生支援機構の第一種奨学金（無利子）の貸与を受けている方又は受ける予定の方、米沢有為会、長井教育会、飯豊町奨学資金の奨学生。大学等を卒業後6か月以内に、山形県内に居住かつ就業し、山形県内の助成対象分野に通算して3年間就業した後、申請し、助成対象者に認定された時点で返還金の一部の助成を受けることができる。

＜出典 山形県商工産業政策課＞

事例3 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組

置賜地区雇用対策協議会（行政機関〔米沢市・南陽市・高畠町・川西町〕やハローワーク等が連携し、若者の雇用安定を目指す団体）が、模擬面接会（高校3年生対象）や企業説明会（高校2年生の就職希望者に向けて企業動画を制作）、新規学卒者ビジネスマナー講習会や新入社員フォローアップセミナーなどの諸事業を実施。求人・求職者の両面からサポートし、雇用の確保と定着、就職支援に取り組んでいる。また、高校1年生を対象とした職業体験会（WAKU WAKU WORK）の開催など、進学者を含め地元にいるうちに地元企業を知ってもらう事業についても展開している。（昨年度は3校計419名の高校生を対象に実施）

事例4 各高等学校における多様な取組

各高等学校においては課題研究や探究学習における地域学習の展開や、職場見学・体験、インターンシップの実施などを通して、郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。

事例5 働く人の様子・思いなどをSNSで発信

米沢商工会議所が、若手社員や経営者などへのインタビューにより地域で働く魅力を発信する「よねざわのわわわ」プロジェクトを企画・実施。高卒就職者や県外大学へ進学後のUターン、他地域からのIターン事例など幅広い情報をインスタグラムや動画などで発信している。

二〇二一年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第四回小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日 二〇二一年十月二十五日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 大 滝 則 忠

〒八二〇〇四 東京都調布市入間町一―三六

東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三三〇九―三三三〇二

ホームページ: <http://www.yonezawa-yuikai.org/>

二〇二一年度置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」

第四回小論文コンテスト

優秀小論文集

発行日 二〇二一年十月三十日

発行者 公益社団法人米沢有為会

会長 平山英三

〒八二〇〇四 東京都調布市入間町一―三六
東京興譲館内

電話・FAX 〇三―三三〇九―三三〇二

ホームページ <http://www.yonezawa-yuukai.org/>